

リフレクティングの体験

—当事者と支援者の会話空間に豊かな「間」と「場」をつくること—

○西池 絵衣子¹⁾、末安 民生²⁾、平岩 千明³⁾、松本 奈央¹⁾

1) 兵庫県立大学看護学部、2) 佛教大学看護学部、3) 武蔵野大学看護学部

企画者らは、臨床場面において当事者(患者・家族・関係者)と支援者双方が最初に出会えた機会を大切にす対話のため試みとして「リフレクティング」の活用を探ってきました。リフレクティングはノルウェーの家族療法を専門領域とする精神科医のトム・アンデルセンによって提唱されたもので、「何事かをじっくりと聞き、考えを巡らし、そして、考えたことを相手に返すこと」(矢原隆行)とされており、共存する会話空間に豊かな「間」と「場」をつくることや、対話の広がりによる新たな展開可能性への期待と魅力を創出することにつながります。日本においては、いくつかの医療機関と訪問看護ステーション、法務関係では全国の矯正施設などにおいて取り組まれています。企画者は、リフレクティング・プロセスが生まれたフィンランドの精神科医療の実践である「開かれた対話(オープンダイアログ)」が実施されているケロプダス病院の教育担当者などから教育目的や方法について学びました。その知見をもとに研究として、精神科臨床では医療機関、訪問看護、教育機関において行い、加えて研究会や学会、現任研修などではワークショップとして看護師などの専門職の対話が生み出す新たな方向性をめざして取り組んできました。最終的には、現任教育において活用され臨床での対話空間の創造を可能にするようなプログラムを作成したいと考えています。そのため、本ワークショップにおいてもリフレクティングを紹介し、どのような方法であれば看護師同士が率直に互いのかかわりを通して患者の人生の物語と向き合うことができるのかを試みてみたいと思っています。そして、参加者の皆さんとこれまでの経験を生かしながらもこれまでは互いに気づかなかった当事者や関係者の気持ちの変化、新たな見通しを生みだすにはなにが必要なのかを考え、「はなす」ことと「きくこと」について考えてみたいと思います。倫理的

配慮：本ワークショップでは、実践に基づく対話内容を扱う可能性があるため、個人が特定されないよう配慮し、事例は匿名化および一部改変を行います。利益相反：本ワークショップに関連して、開示すべき利益相反はありません。